

県評価調書

【評価の基準】

- (1) 多様化・高度化する県民ニーズや社会経済情勢等の変化への的確な対応
- (2) 厳しい財政状況を踏まえた簡素で効率的な事業展開
- (3) 県の財政的、人的関与の適正化による主体的・機動的な団体運営
- (4) 役職員体制の適正化による自律的かつ効率的な組織運営
- (5) 積極的な情報提供の推進による団体に対する県民の理解と信頼の促進

1. 評価結果(個別事項)

	評価内容	評価
団体のあり方	自然系博物館を管理運営する団体として、自然環境の保全や、自然環境・保護に関する調査研究および普及啓発事業を行い、この分野では島根県における中心的な役割を担っている。当初より設立目的から逸脱することなく、県民の自然環境に対する要請に応える事業を展開しており、非常に高く評価できる。財団設立後13年が経過し、職員一人一人が県内の第一人者として成長しており、県内で同じレベルで業務を行える団体はなく、県としても信頼のおけるパートナーとして協働して事業を行っている。	A
組織運営	理事会と経営委員会が相互チェック機能をもちつつ運営されており、役員の人選、人員配置も適切に行われている。また、職員給与、個人情報保護など、すべての規定が整備され機能的に運用されている。人員配置も実情に合わせた適正なものといえる。	A
県の人的関与について	県職員は経営委員として参画しているのみで、財団は主体的な団体運営を行っている。	
事業実績	イベント参加者や館内においてアンケートをとり、利用者のニーズ把握に努めており評価できるが、アンケート結果や、事業の費用対効果、コスト面の分析・活用については、もう一歩進んだ取り組みが必要だと思われる。財団は指定管理者制度が導入された17年度より、チームをつくってそれらの分析・活用を進めることとしており、これからの期待が持てる。また、三瓶地域の他施設、出雲古代歴史博物館オープン、石見銀山の世界遺産登録に合わせた取り組みや、県内の他の自然系博物館との連携を行うなど、財団の中だけでなく広域的な事業展開を期待する。	B
財務内容	借入金はなく、自己資本比率も上昇するなど、現在のところ財務状況に問題点はない。17年度より、全面的に利用料金制が導入されたため、来場者を増やし、収入をあげていく努力が必要となる。	B
県の財政的関与について	もともとが、県からの受託事業を受ける団体として設立されたため、財政的関与が高いのはやむを得ない面がある。しかし、16年度の県への財政的依存度は78.3%と、年々低下傾向にある。17年度より全面的に利用料金制が導入されたため、この低下傾向は続くものと思われる。	

評価の目安 A:良好である B:ほぼ良好である C:やや課題がある D:課題が多い

2. 総合評価

	課題の内容等	今後の方向性	評価コメント
団体の経営評価報告書における総合評価について	三瓶自然館の自然系博物館としての機能充実と附属施設の効果的な運営。	1. 自然系博物館として調査研究及び博物館標本の収集整理を長期的な計画をたてて実施する。 2. ふれあいの里奥出雲公園の有効な利用方法を策定し、それを目指した整備を進める。	島根県の自然に関する調査・研究・普及の中心機関として研究を進めるとともに、それらの結果を積極的に展示等により、県民に向けて公表してもらいたい。 ふれあいの里奥出雲公園の活用方法は、当課としても一緒になって考えるべき問題であり、協力してよりよい利用方法を検討したい。
	他施設や関係機関との連携を積極的に行い、地域全体としての魅力アップを図る。	1. アクアス、ゴビウスなど県内自然系施設と連携し、協力と分担をしながら互いの魅力アップにつなげる。 2. 出雲古代歴史博物館や石見銀山地域との協力関係を模索し、幅広いネットワーク作りを行う。 3. 三瓶地域の関係機関と協力し地域の活性化を図る。	財団単独でなく、三瓶地域の関連機関と共に地域の活性化を図ることや、近隣地域の施設と連携した広域的な事業展開を行うことは、利用者確保のため欠かせない取り組みである。また、他施設との連携が新たな展示・普及事業を考える上でも役に立つと思われる。三瓶自然館をはじめとする施設の魅力を高めるためにも、ぜひ力を入れて取り組んでほしい課題である。
	限られた財源の中での効率的な運営を目指す。	1. 指定管理者制度の導入により、毎年度の指定管理料が固定化されている。その中で、よりよい事業を実施していくための工夫が求められている。 2. 人件費については、全体の抑制を図りながらもスタッフの能力評価制を導入し、やる気を引き出すシステムとしたが、能力評価のあり方については、検討を加え実施する必要がある。	指定管理者制度が導入され、限られた予算の中でよりよい事業実施が強く求められることとなった。現在制度導入後約4ヶ月が経過しているが、職員一人一人が高い意識を持って業務にあたり、利用者への新たなサービスを始めるなど非常に高く評価できる。県としては引き続き財団の状況を把握し、監督していく必要がある。

総合コメント

三瓶フィールドミュージアム財団は、平成16年度からふれあいの里奥出雲公園の管理を引き受けることとなった。また、県からの施設管理委託費は前年度(H.15)に比べ大幅な減となるなど、厳しい状況の中での運営を迫られた。その中において、コストを抑制して効率的な運営を図り、規模や質を落とさない努力を持って業務を行っており、大いに評価できる。

17年度からは、施設全体に利用料金制が導入され、向こう5年間は指定管理者として管理運営を行っていくこととなっている。三瓶自然館とその附属施設を適正に管理することを目的として設立された団体ではあるが、これから先は自主的な管理運営と、今まで蓄積してきたノウハウと島根の自然に関する知識を生かして来場者を増やし、積極的にPRを行う等の取り組みが不可欠となる。三瓶自然館は、本県の自然保護に関する普及啓発の拠点施設であり、当課としても積極的に取り組みを支援していきたい。